

今号は去る9月14日に帝国ホテルで開催された日本IBM主催のGIOサロンのテーマ「企業のイノベーション」を受けて『無限大』流に発展させ、特集を組んでみました。

企業がイノベーションを興そうとすると、行く手にはさまざまな障壁が立ちただけ、経営者はジレンマに悩みます。しかし、今回お話を伺ったのは、いずれもそうしたジレンマと果敢に戦いながら、既成概念や成功体験を断ち切ってイノベーションを推進し、業界のリーダーとして前進を続けている企業ばかりです。

イー・アクセスの千本会長の指摘された問題点は、今日のグローバル経済下の「短期成果主義」が、「企業が成長のために投資する一定期間の予定された赤字」までも、市場がなかなか容認しにくいというジレンマ。これはアスクルの岩田社長も、GIOサロンのパネル・ディスカッションの中で言及されていたことでした。株主利益を最優先する市場経済においては、近年、どの企業でも直面するジレンマであり、まさに経営者の前面に立ち塞がる巨大な壁なのかも知れません。世界的な大きな経済の流れの中で、経営者の舵取りはますます大胆かつ繊細な決断と配慮を強いられているようです。

ザインエレクトロニクスの飯塚社長は、平成の坂本竜馬といわれているそうです。時代の先を見通す眼をもち、先頭に立って道を切り拓こうとする憂国の志士、といった雰囲気は確かにそのような気もします。10年前と比べ、売り上げが100倍に伸びている実績には目を瞠るものがありますが、そうした自社の経営のみならず、日本全体に経済の活力を取り戻すべく、ベンチャー企業創出にも精力的に取り組んでいらっしゃる姿からも、そうした呼び名が合った所以が理解できるような気がしました。

広島の世界羅町が取り組んだ農業のイノベーションを、皆さんはどのように感じられたでしょうか。世界羅町役場では、職員の皆さんのリーダーシップのもと、農業の企業化を進め、農業を再生し、遊休農地を活性化させ、雇用を活性化させ、さらには町全体を活性化することに成功しています。工作機械メーカーや建設業の、いわば農業の素人社長が自分たちのノウハウを活かし、従来の農業ではなく「野菜工場」という観点でイノベーションを興した成功例です。

いま、日本の農業の自給率はカロリーベースで40%。穀物自給率は28%で、世界175カ国・地域のうち128位、人口1億以上の国の中では最低だそうです。

「機械や装置を造るのも、野菜を作るのもそう変わらない」、「中国の購買意欲と能力はすさまじいものがある。

このままでは近いうちに日本は食糧難民になるよ」。工作機械メーカーの社長として、アジア各国を飛び回ってビジネスを展開される日本農園の河原社長の言葉がいつまでも耳に残っています。

世界一の職人といわれる岡野工業の岡野社長。江戸弁でつぶが良く、ユーモアたっぷりのお話ぶりに抱腹絶倒、前代未聞の取材経験でした。人にできないものだからこそ、自分がやってやろうじゃないか、という全身イノベーションの塊のような職人・岡野氏のお話には、人間として大切な真理がぎっしり詰まっていて、元気とやる気と幸せな気分をお土産に、帰途に着きました。

ここ数年、日本経済新聞の優良企業ランキングで何度もNo.1に輝いている武田薬品工業は、225年の歴史を誇る老舗企業です。ひところ企業の寿命30年説が流行りましたが、最近のそれはますます短くなって10年とも5年ともいわれています。それを思えば、同社のこの超優良企業としての存在がいかに偉大であるかが分かります。

「普通のことを普通にやる」、「生き延びられるのは、変化に対応できるものだけ」。長谷川社長のこの言葉の裏には、強力なリーダーシップのもと、時として大鉦を振って社運を賭けたイノベーションを断行し、日頃はやるべきことを誠実に実行しているタケダイズムの極意を垣間見る思いがしました。

「無限大ギャラリー」でご紹介したIDバスケットのナショナル・チームを率いる小川直樹監督。彼が監督として初めて望んだシドニー・パラリンピックのとき、「なかなか資金が集まらず本当に苦労したが、企業として初めて手を差し伸べてくれたのが日本IBMだった」というお話があり、取材して何だかほっとしました。

サッカー・ワールドカップの熱気の何十分の一でも、関心と支援を振り分けられるよう、そろそろ日本もハンディを抱えた人たちをみんなで応援するような成熟した社会をつくっていけないものか、と思います。

お知らせ

今号から、『無限大』の記事をインターネット上で読めるようにしました。

URL : <http://www.ibm.com/jp/ibm/mugendai/>

『無限大』編集人 松野元子
ibmmugendai@infoseek.jp
FAX : (03) 6563 9444